

帰農

～指扇再生～



K03020 今井健仁

◇帰農とは

字のごとく、まさに農業に帰ることである。近年専業農家は激減し、かつての専業農家は、規模を縮小した兼業農家や農業自体を廃業する農家も増加傾向にある。

結果として野菜などの農産物は国外からの輸入に頼り、農薬を大量に使用し量産のみに重点をおいた野菜を多くの人々が口にしている。

また今日では遺伝子組み換え食品等、食品に対する不安は増える一方である。

そこで、帰農に着眼し崩壊した日本農業の再生を考える。

◇農業の魅力

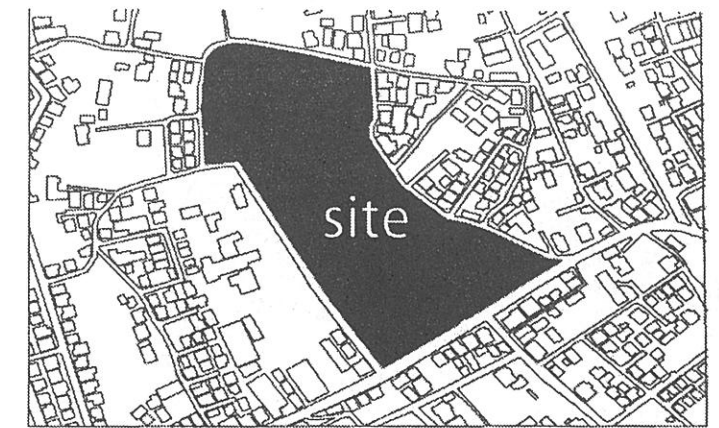
農業をやる上で他のものでは得られない喜びがある。それは作物を育てるという行為による、生命産業の喜びである。また自由度が非常に高いということも魅力の一つである。それはすなわち、今まで社会や会社に縛られて生活してきた者にとって、個性的な生き方が可能になることを示す。さらに、遺伝子組み換え食品等の現在の農産物への不信感という点においても、自給自足が解決に導く。

しかし、やはり自分で育てた野菜や米を食べて暮らすということが最大の魅力である。

市街化調整区域

◇敷地

埼玉県さいたま市西区指扇の市街化区域と市街化調整区域の境目を利用する。帰農をテーマにした建築ということで、市街化区域と市街化調整区域とのつながりをあえて作る。



市街化区域

site

◇さいたまの問題点

さいたまは東京のベッドタウンとして開発されてきた。そのためにさいたまはつまらない都市になった。どこの町の風景も、大手チェーンの大型スーパーが建ち並び、その回りを建売の同じような住居が建ち並ぶ。さいたまはどこも、みんな同じような景観となってしまう。

◇指扇という町のこれから

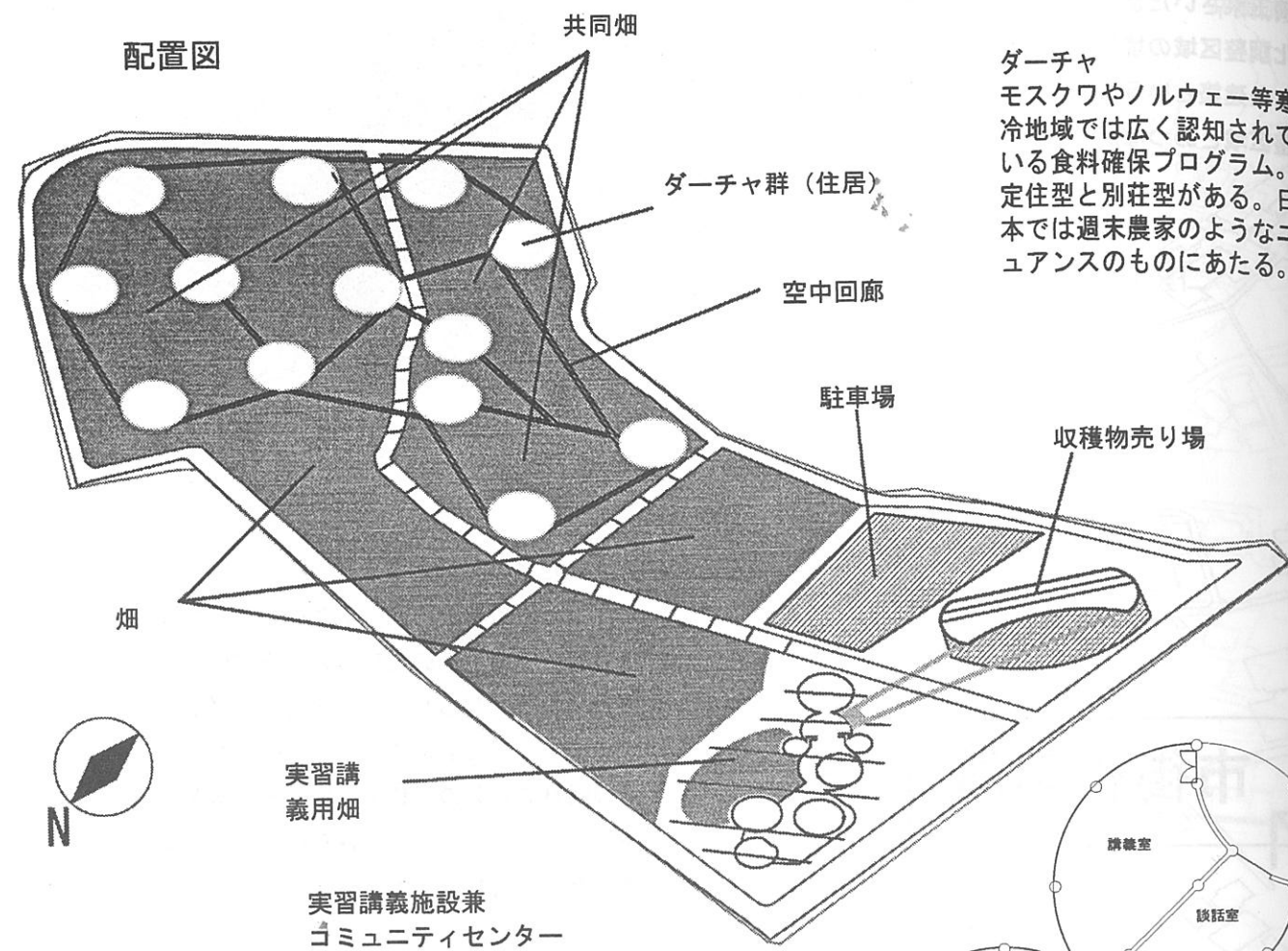
指扇はさいたま市の西にある、旧農村である。今では、市街化区域に街の半分以上が指定され、かつての農村としての面影はまったくと言って良いほどない。市街化調整区域は昔と変わらない農村の面影を若干残してはいるが、道路一本を挟んだ市街化区域と市街化調整区域の間は、指扇の街を大きく分断する壁となっている。

このように強引に区域毎に分断されているこの現状をこのまま野放しにすると、他の地域と同じつまらない街になってしまう。これを打破するために新しい取り組みを始める必要がある。

◇コンセプト

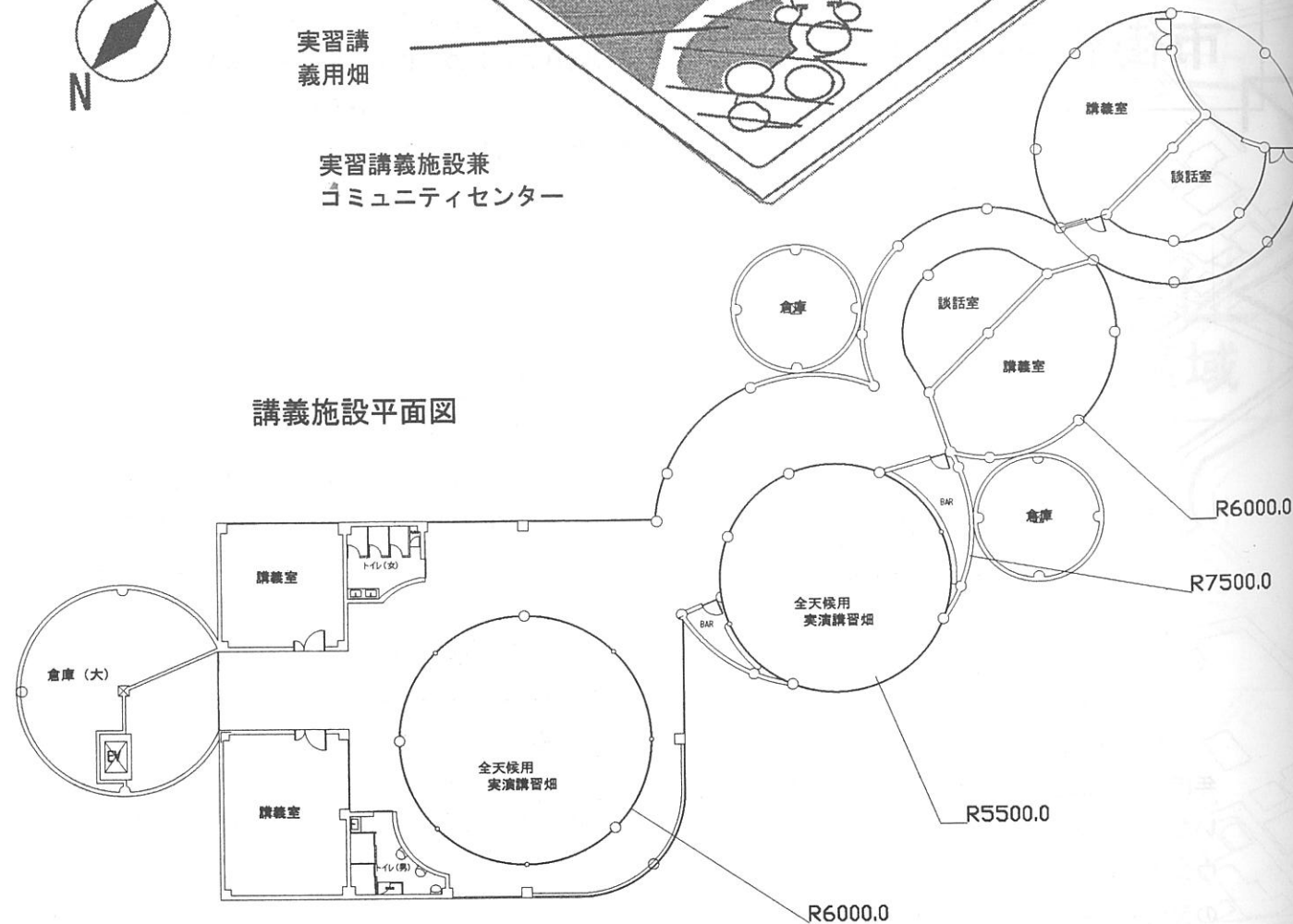
私の住む指扇は自身が小学生まで（10年ほど前）は農家の方も多く、農業が見えていた。このまま市街化区域が増え、ベッドタウン化が進むと20年、30年後には、今のこの景色・面影がなくなり、住んでいる人間さえもかつての指扇を知らないという事態が考えられる。そのため、指扇の文化としての農業を残し、かつての面影を守り、指扇の個性を残す必要があると考え、指扇を回帰させ指扇再生を目指す。

配置図

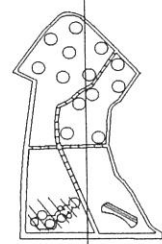


ダーチャ
モスクワやノルウェー等寒冷地域では広く認知されている食料確保プログラム。定住型と別荘型がある。日本では週末農家のようなニュアンスのものにあたる。

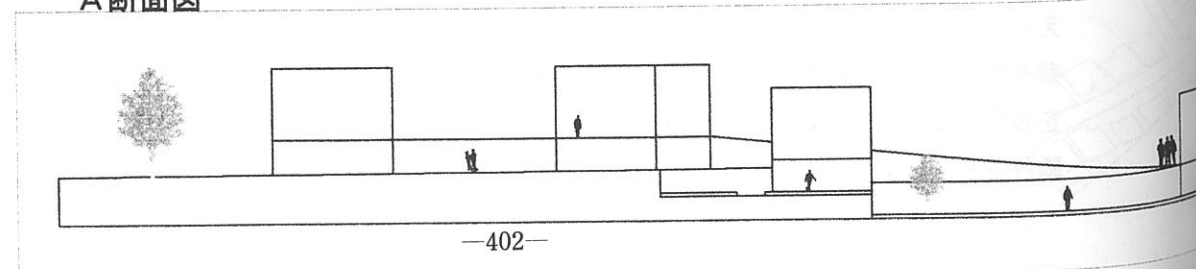
講義施設平面図



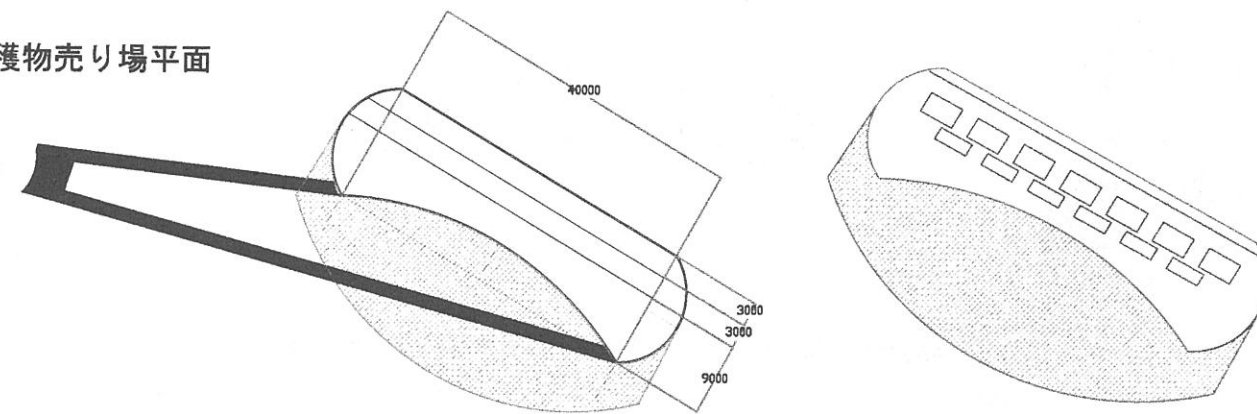
A-断面線



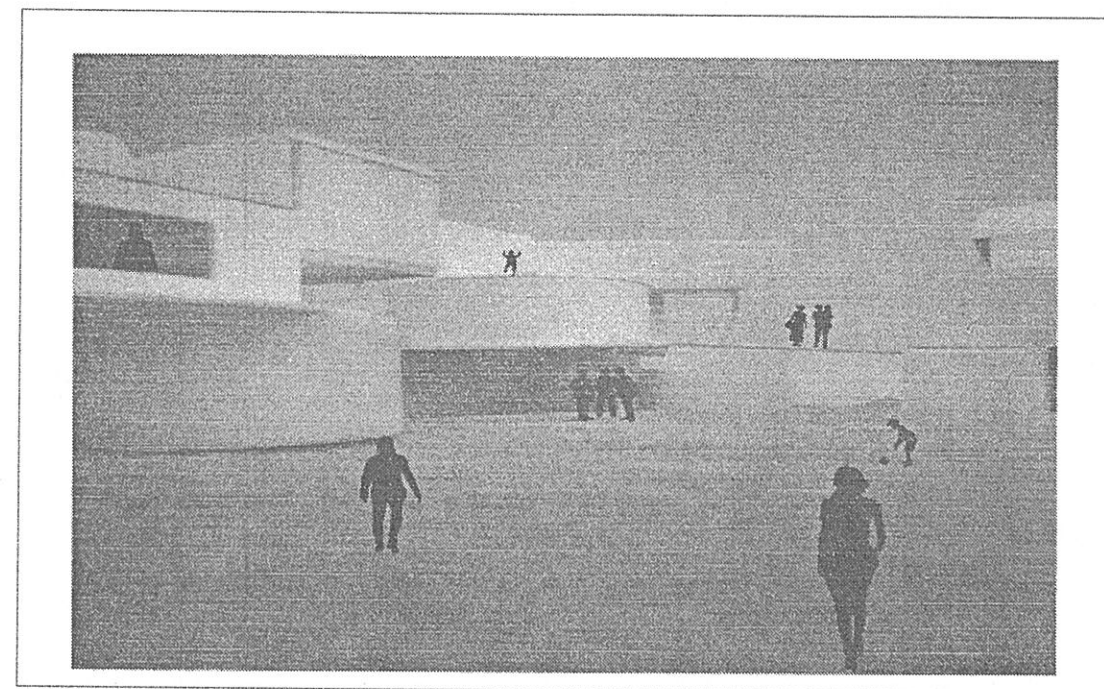
A断面図



収穫物売り場平面



ダーチャ群イメージ



敷地・・・回帰していく。 人も回帰する。
人と共に住まいも回帰する。

敷地——農村 人——年少時代 建築——秘密基地

人が回帰し、機能が回帰し、それらを包む空間が回帰し、
すべてが回帰する。